

江戸時代には、それまで寺院や特定の建物に用いられていた瓦が、一般にも広く使用され始めます。高松・丸亀 2 つの城下町を持つ讃岐では、それらの都市を中心に瓦の生産・利用が拡大し、それに応じるように、城下町や近世の城の発掘調査では、大量の瓦が出土するようになります。それらの瓦は現役の建物などにも踏襲されます。

江戸時代の瓦の生産の変化を、城下町の発掘調査の成果などを中心にまとめ、それらの周辺への拡がりや瓦の流通について、現代の建物の瓦の分布から考えます。

0、はじめに ～近世の瓦の基礎～

○瓦の使用→寺院の屋根材として使用が開始され、都城、国分寺、国分尼寺といった施設の建設にともない生産が拡大するが、次第に瓦葺きの建物の減少。

中世には瓦生産は比較的低調となる。

※瓦生産が再び活発になるのは、近世の城建設とそれに伴う城下町の発展。

また、近世初期は瓦を葺く建物は限られるが、18世紀以降（享保年間）、頻繁に起こる大火などから、火災に強い瓦葺きが励行され、それに伴い一挙に瓦の使用が増加した。

○瓦の種類

本瓦葺…古くから用いられてきた手法。丸瓦・平瓦を組み合わせで行う。軒先には軒丸瓦、軒平瓦を葺く。(図1、2)

棧瓦葺（日本型）…延宝2年（1674年）に、近江の西村半兵衛により考案された型式で、本瓦葺の簡易版として開発される。丸瓦と平瓦を合わせた形の棧瓦を用い、明治期から本格的に全国に波及する。

○瓦の製作技法

原材の粘土を鉄線や糸で切り離し、粘土板を作り制作される（近世の初めごろに、糸切り～鉄線切りへと変化する）。

そのほかの技法や、それらの移り変わりについて

○発掘調査で見つかる瓦について

大量に投棄される瓦…建物の建て替え、廃絶に伴うもの、建物の性格も示されるか

1、 讃岐の近世瓦～高松藩領を中心に～

城下や城で行われる発掘調査や、資料の再検討により、細かな年代観や周辺地域との対応が考えられ、提示されている。各発掘調査報告や、先学の業績により、それらの成果のうち、瓦に関係するものをいくつかまとめる。

○城・城下町の建設と瓦

築城初期には、少量ではあるが中世瓦の特徴を持つ瓦が見られる。

慶長年間以降は、岡山城と同氾の瓦が高松城でも多量に出土する。これらは、先に城の建設が始まった岡山城からの瓦の供給、ないしは瓦制作技術の供給があったものと考えられている。

○城下の拡大と瓦生産

高松城下図屏風（17世紀中頃の高松城下を描いた図）の建物を見ると、瓦の使用は同じ性格の建物でも、場所（住む武士の階級や城との位置関係により変化）によって有り無しが想定できる。特に瓦葺の建物は、屏風の中では700石以上の石高の者の屋敷にしか葺かれないことが、絵図の記載と住人の記録より考えられている。

○生産の画期と変化について

城下の瓦の変革は18世紀前半から始まる。これらの背景には、享保3年（1716年）の高松大火による大規模な火災があり、その復興の際に、大量の瓦を葺く建物が増加した可能性が高い。このほかの事象も、生産に変化をもたらし、いくつかの画期が想定されている。

近世の中での大きな変化として

①新たな技術が導入（丁寧な調整。瓦当剥離のためのキラコの使用等）

②城下を中心に統一された文様の瓦（軒平瓦）が藩領の中で生産、流通されるようになる。（半裁花菱文）（図2）

2、 讃岐の近世瓦～丸亀藩領を中心に～

○丸亀城の建設と城下町の整備

慶長2年（1597年）からの城の建設…開始期の造瓦の実態は不明瞭

○丸亀城下の瓦生産の変化

瓦は、丸亀城の建築に際して多量に使用されたことが想定されるが、築城開始期の状況は不明。のちに山崎家、京極家といった藩主が進めた城下の開発に伴い、瓦の生産量が増加すると考えられ、その時期の遺構から瓦の出土量は増加する。

丸亀城下の瓦生産の変化については、18世紀後半に一つの画期が認められる。

代表的なものは

①新しい製作技術への変化（瓦の氾の精緻さ、燻しの入念さ、キラコの使用）

②文様の創出と統一（蔦葉文様の生産拡大）（図3） が挙げられる

生産の変化の要因については、全国的にみられる瓦葺きの奨励という傾向もあるが、丸亀独自の要因として、天守の瓦葺き（安永7年・1777年鬼瓦の銘）に伴う城内整備の瓦需要、多度津藩陣屋建設（19世紀初頭～）などが想定される。

○生産地の変化について

瓦町が早い段階から存在するが、それ以外の生産地は不明。

3、 瓦の流通と変化

○瓦の流通について

同じ文様を持つ瓦や、刻印を有する瓦から、流通の一端を解明することが可能。

特に19世紀以降は、各地の主要な瓦などが海運を利用して運ばれた藩もある（例：伊予の菊間瓦、大阪堺の瓦等の各地へ瓦を搬出する生産地）。

○刻印からみた瓦の流通

瓦に残される刻印と、それが施される瓦自身との対応を考える。

高松・丸亀両藩刻印瓦は18世紀ごろから目立つが、丸亀の方が数、種類も現状では多い。

19世紀以降は刻印数も増加し、内容も複雑となる。（四角い囲いに複数の文字を記す）瓦屋の屋号が省略され記される例もある。出土例や、現在の建物の現役瓦の分析から、瓦屋が幾つもの系統を持ち、同種の瓦を製作していたことが明らかになってきている。また、城下とその藩領のみではなく、藩や讃岐国といった範囲を越えた遠隔地においても、讃岐産（丸亀産）瓦の刻印や特徴的な文様が施された瓦が見つかる例もある。（岡山市宝福寺、下津井の円福寺、下津井の民家建物等）。県内のいくつかの現役瓦にも、刻印を有するものがあり、消費の範囲を知る手掛かりに。

○文様、技法から推定される流通

18世紀代から、各藩の特色ともいえる文様が出現する。現役建物の瓦も含めた分布のあり方によって、流通の状況が分かる（図5）。それらは藩により異なる（高松藩については、おおむね藩の領域に収まるが、丸亀については、その分布状況がある程度分散的かつ藩の領域などに規制されていない。海を越え対岸の岡山県域にもわたることから、藩を越えた流通を考えなければならないか）。香川県西部の分布状況については、山間部も含めて調査が十分できていないが、下津井の例のように、海上のルートでの流通が目立つようにも見える。

このほか、近年の発掘調査により、大阪中之島蔵屋敷のうち、高松藩の蔵屋敷が発掘調査され、国元の土器や、半裁花菱文を施す瓦が出土している。文様は共通するが、それ以外では共通しない点も認められている。

4、 おわりに ～讃岐の近世瓦の特徴と課題～

【讃岐の近世瓦の特徴】

- ・本瓦葺きへのこだわり？
- ・自藩の瓦へのこだわり？他藩産の瓦の導入の比率
- ・各藩での主流文様の創出（高松の半裁花菱、丸亀の蔦葉）その流通のあり方が異なる？
- ・瓦町を始めとした生産地の中での瓦屋の数（丸亀藩は刻印のバリエーションなど豊富）。
- ・棧瓦の普及が遅く、なおかつ瓦自体の形も異なる例がみられる。

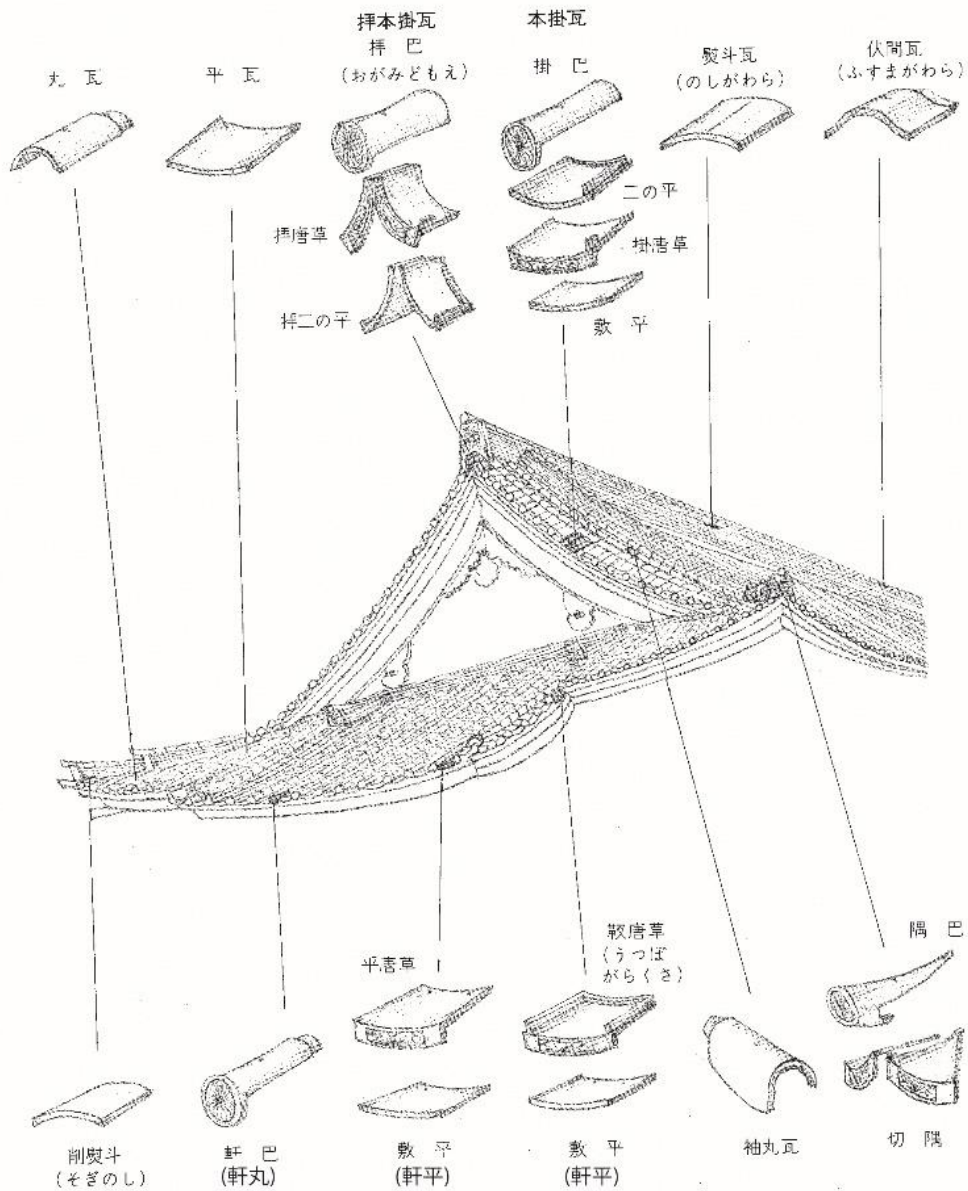


図1 本瓦葺きの瓦名称①（坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』理工学社 の図を一部改変）

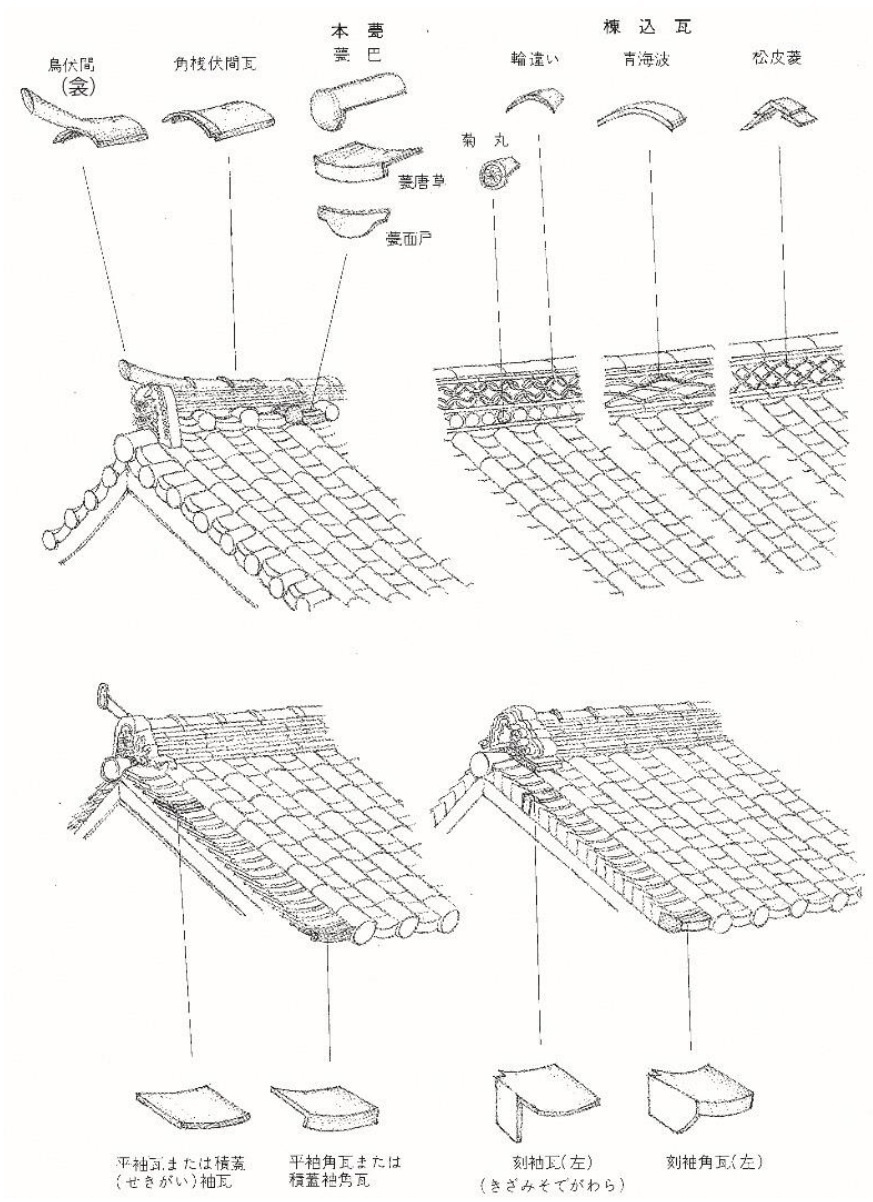


図2 本瓦葺の瓦名称② (坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』理工学社 の図を一部改変)



図3 高松城下で主流となる文様
「 半裁花菱文 」



図4 丸亀城下で主流となる文様
「 蔦葉文 」

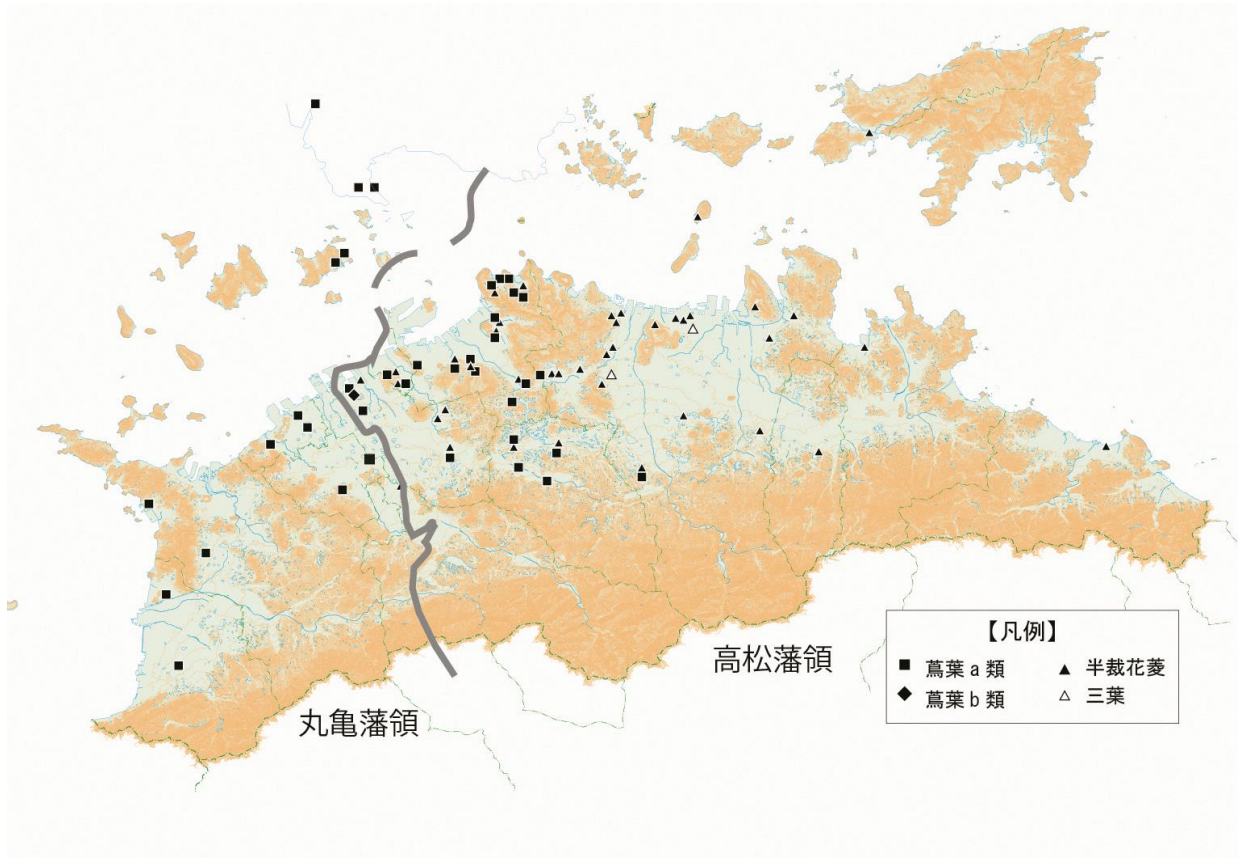


図5 讃岐における近世後半～近代の瓦文様の分布

	菊花文系	三葉文系	宝珠文系	渦文系	半裁花菱文系	蕨葉文系	その他・不明
丸亀城1期 (17世紀後半) 山崎・京極				a 類 b 類			
丸亀城2、3期 (18世紀前半) 宝永地震 (1707) 京極							
丸亀城4期 (18世紀後半～19世紀前期) 主流文様の勃発 安永7年天守瓦葺替 京極				文様の断絶?	高松藩領主流文様 (胎土臭、模倣?)	丸亀主流文様の普及 (キラコ使用)	
丸亀城5期 (19世紀前半) 主流文様の定着 柱瓦の普及 多度津藩陣屋建設 京極		文様の断絶?				a 類 b 類	
丸亀城6期 (19世紀中頃～明治8年) 刷印の多様化 武家屋敷解体に伴う多量の廃棄 京極	少数派として存続		少数派として存続			c 類	

図6 丸亀城跡 (大手町地区) における軒平瓦の様相

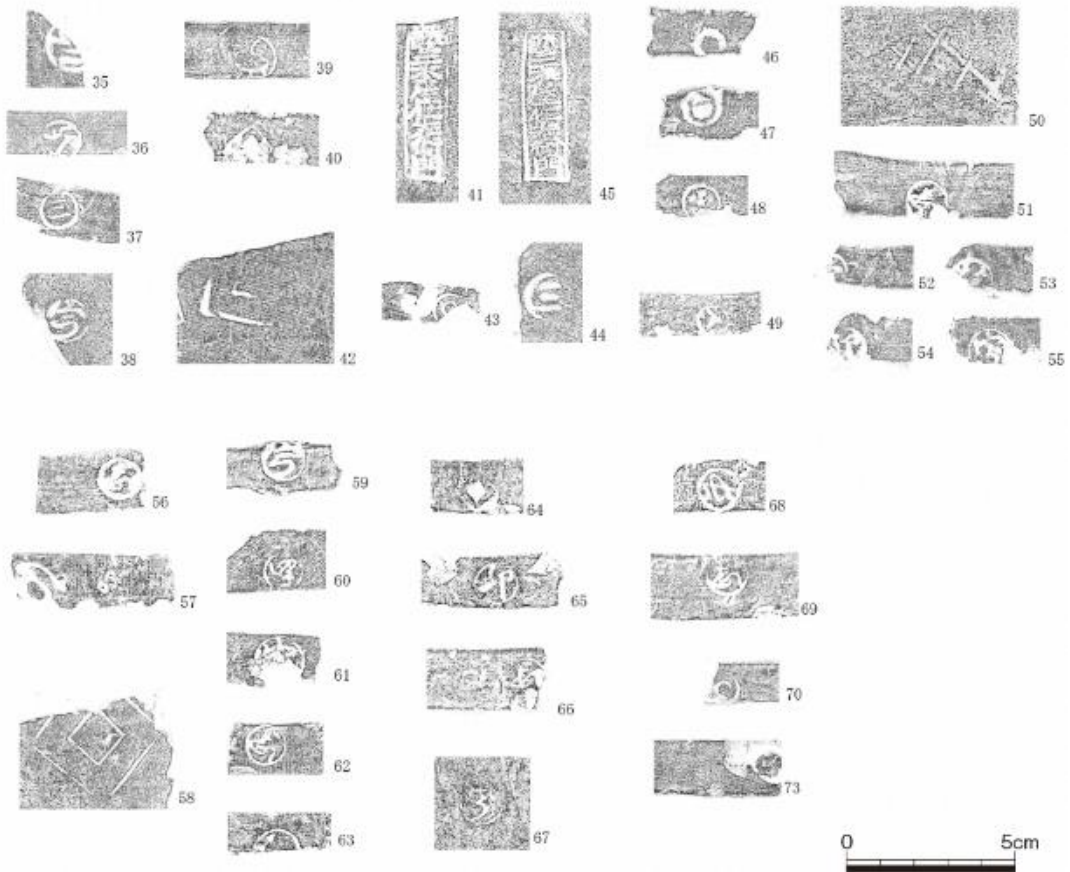


図7 丸亀城跡（大手町地区）における瓦の刻印の例

				町名															
<ul style="list-style-type: none"> ・風袋町は全員が士卒族である ・足輕、小人、小人小屋には氏名の記入がないところが多い 一軒に二戸以上の住人がいたと思われる所もある ・医師苗村玄達、蒔絵師、細工師の広大な屋敷がある ・番人11とあるのはお城、藩主の居館などの番人であろう 	計	間口 1~3.5	間口 4~4.5	間口 5~	右計	左官大工 番人二文前 郡代郡手丸 若州細工師 蒔絵師 足輕同小頭 与外頭 小人小屋 御馬屋 小人頭 小人 すねふりその他	171	0	9	162	171	7 8 1 3 53 2 2 3 11 3	風袋町 (4)						
	右計	14	うち瓦業	14	12	瓦師								8 22半26半 × × × 8 11 20.1 明現堂 (妙見宮々) 専念寺 宝津寺	瓦町 旧北平山の内の 御供所の内				
この地はほとんど畑で、西方に瓦業一軒 (瓦師一人) と南西方に寺と御堂があるだけである	右計	14	うち瓦業	14	12	瓦師													
	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	一反反	菜園場畑 平屋善兵衛 文孫清五長伊 右右右右右右 衛衛衛衛衛衛 門門門門門門	瓦師 権三郎 庄三郎 吉左衛門 九兵衛門	瓦師 大郎 左衛門 伊兵衛 長兵衛 貞兵衛 五右衛門 孫右衛門 清右衛門 文右衛門	瓦師 三右衛門 助右衛門 次右衛門		

図8 丸亀藩の瓦町の住人 (元禄年間家中家並表より)
(丸亀市史編さん委員会 1994『丸亀市史 近世編』より引用)